様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０２５６

研究課題名（和文）小学校外国語活動における児童の動機づけと情意要因に関する縦断調査

研究課題名（英文）Rieko Nishida

研究代表者
西田　理恵子（Nishida, Rieko）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・講師

研究者番号：９０６２４２８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、小学校外国語活動における児童の聴覚能力と動機付け・情意要因に関する縦断的調査（2年間）を行い、児童の変化の傾向を捉えた。2012年～2013年度の調査では、2012年7月と2013年2月に測定した結果、5年生・6年生共に聴覚能力・情意面が上昇し、2012年～2014年度にかけて(2012年7月・2013年2月・7月・2014年2月）の調査においては聴覚能力は上昇、情意要因は維持した。

研究成果の概要（英文）：The study describes a longitudinal study of elementary school students' listening abilities, motivation, and affective factors. The study was conducted from 2012 to 2014 to see students' changes. As a result, students' listening abilities, motivation and affect in language learning increased and/or maintained throughout the course.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：外国語教育学

キーワード：小学校外国語活動　動機付け　情意要因　聴覚能力

１．研究開始当初の背景

文部科学省が外国語活動と目的とするのは、「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」である。即ち、児童の外国語活動において、動機づけに関わる情意要因である異文化への関心を深め、積極的にコミュニケーションに参加できるようにすることが目的であるといえよう。しかし、現時点では、各都道府県では本格導入に向けての教員研修や英語ノートが配布されているものの、小学児童における動機づけ、異文化への関心、コミュニケーションへの積極性、CANDO、言語能力（リスニング）が外国語教育を行うことで縦断的にどのように発達・変化するのか、そのメカニズムを詳細に解明するような調査は行われていない。しかし、児童の言語運用能力（リスニング）について明らかにすることや児童の言語能力と情意要因の関係について調査を行っていくことは、今後の小学校外国語活動を実施する上で、きわめて重要な情報を提供するものとなろう。以上の知見から、本研究では、児童の動機づけ、異文化への関心、コミュニケーションへの積極性、またそれらに関わる情意要因と言語習得（リスニング）に関する縦断的調査を行うことで、小学児童への外国語教育に関する実証研究にとって重要な情報の蓄積に貢献する。

２．研究の目的

本研究では、小学校外国語活動における動機づけ、情意要因、言語運用能力（リスニング）に関する研究を縦断的調査方法を用いて、これまでに明らかになっていない児童の情意と言語能力に関する長期的な変化の傾向と特徴を明らかにする。小学校外国語活動の場面において児童の情意面に焦点が置かれているが、縦断的調査方法を用いた調査は数少ない。縦断調査を介して児童の動機や情意要因の変化に関する全体傾向と個人差傾向を精緻な手法を用いて解明する事で、カリキュラムの見直しや指導案の改善、教材作成など多岐にわたって教育的貢献を成し遂げることを目的とする。

３．研究の方法

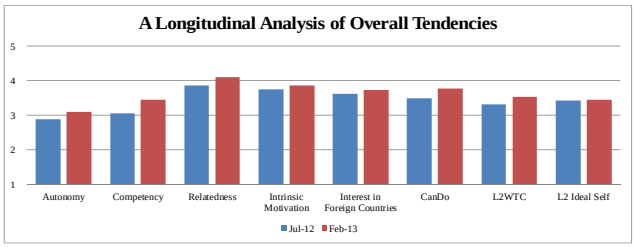
研究方法には、量的研究・質的研究の実証研究アプローチを用いて、児童の変化と変化のプロセスを捉える。量的研究には、質問紙（自律性・有能性・関係性・内発的動機づけ・外国への関心・CanDo・L2WTC・L2 Ideal Selves）・リスニングテストを実施（2012 年 7 月、2013 年 2 月、2013 年 7 月、2014 年 2 月）する。質的データ収集には、2012 年 4 月～2014 年 3 月までの教室内での観察記録とビデオデータ、教師への面接を中心に分析を行った。

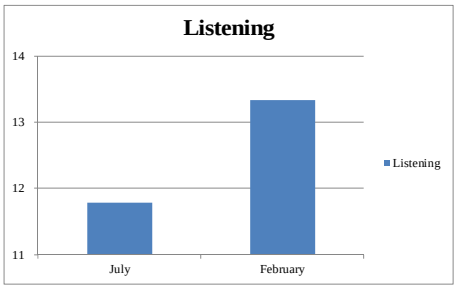
４．研究成果

《調査結果 1》

2012 年 7 月～2013 年 2 月にかけての質問紙とリスニングテスト（英検ブロンズテストの一部を援用した）を実施した。5 年生・6 年生を総括した結果を以下に示す。

Variables	Time	*M*	*sd*
Autonomy	Jul-12	2.88	1.00
	Feb-13	3.10	1.01
Competency	Jul-12	3.05	0.87
	Feb-13	3.44	0.81
Relatedness	Jul-12	3.85	0.81
	Feb-13	4.09	0.69
Intrinsic Motivation	Jul-12	3.76	1.07
	Feb-13	3.85	1.02
Interest in Foreign Countries	Jul-12	3.61	0.96
	Feb-13	3.72	0.87
CanDo	Jul-12	3.48	0.96
	Feb-13	3.76	0.75
L2WTC	Jul-12	3.32	1.09
	Feb-13	3.54	0.92
L2Ideal Self	Jul-12	3.42	1.00
	Feb-13	3.45	0.84
Listening	Jul-12	11.78	1.83
	Feb-13	13.34	1.67





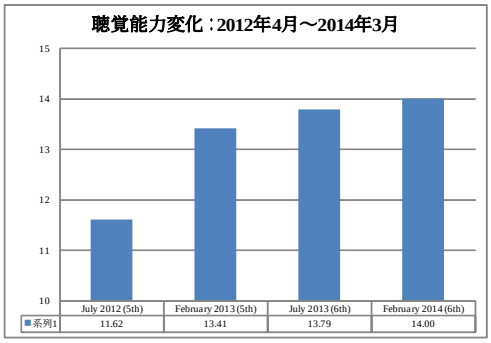
調査結果から、2012 年 7 月と 2013 年 2 月を比較すると、リスニングテストについては肯定的な変化があり、*t* 検定（対応あり）では統計的有意差も認めている。動機づけ、情意要因についても、半年後の 2 月には肯定的変化があり、特に、有能感と CanDo に有意差を認めた（西田 2014-研究成果報告書参照）。

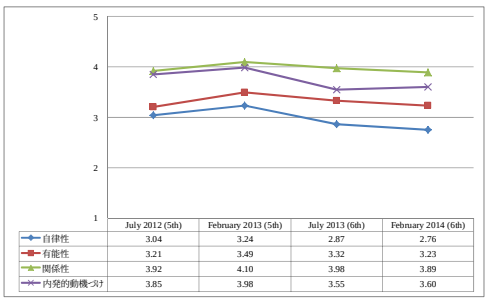
《調査結果 2》

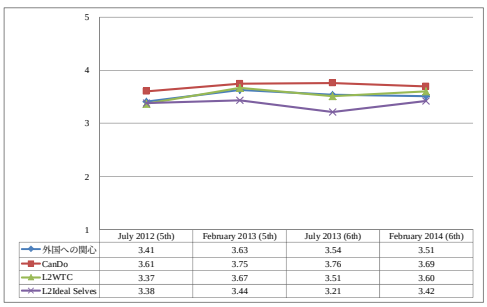
2012 年～2014 年にかけても調査結果

2012 年～2014 年にかけて、縦断的調査（2 年間）を行った結果を示す。本児童においては、5 年生時から 6 年生時にかけて調査を実施し、合計 34 名の児童を調査対象者とした。結果として、2012 年 7 月（5 年生時）と比較して、2013 年 2 月、2013 年 7 月、2014 年 2 月とリスニングについては上昇する傾向にあり、特に 2012 年 7 月と比較すると、5 年生の後半（2 月時点）、6 年生の時点では反復測

定分散分析の結果、統計的有意差を認めた。







2012 年 7 月、2013 年 2 月・7 月、2014 年 2 月の 4 度にわたり、心理的側面に関する質問紙調査を実施している。自律性、有能性、関係性、内発的動機づけ、外国への関心、CanDo、L2WTC、L2IdealSelves を測定した結果、若干低下する傾向にある情意要因（内発的動機づけ、自律性）があるものの、その他の要因（関係性、有能性、外国への関心、L2WTC）については、5 年生の 2 月（2013 年 2 月）に上昇傾向にあるが、その後、維持しているか、あるいは CanDo や L2Idealselves については維持する傾向にあることが明らかになった。

更にクラスター分析を用いて個人差を分析しいてるが、上位群・中位群（2 群）・下位群にクラスター化され、とりわけ、下位群においてはリスニング力が 2012 年 7 月時では低かったものの大きな変化を示した群が認められた。上位群においては、言語面・心理面の両側面において高い傾向を示すことが明らかになり、約 6 割の児童は中位群に属することが明らかになった（Nishida, 2014 学会発表―15 参照）。

変化の傾向について教師の面接からリスニング能力に関しては次のことが明らかになった（一部抜粋）。

2013 年 3 月（担任）
「1 学期と 3 学期を比較するとリスニング能力には変化があったと思いますね。児童たちは英語できいて、英語で応えていましたしね、最初は少し恥ずかしそうにしていましたがリスニングに関しては大きな変化があったと思います」

2014 年 2 月（教室内支援員）
「リスニングは目に見えてはわからないけれど、英語で返せなくても日本語で返事をしていたりとか、5 年生時には担任の先生が日本語で説明したけれど、わかるやろって日本語が減っていましたね」

教師の面接から、児童の情意面については以下のことが明らかになった（一部抜粋）
2013 年 3 月（担任）
「英語ができてうれしいって思うようになったんとちがうかな。ALT の先生はいつも褒めていてくれたし。できるって気持ちが芽生えたんとちがうかな」

2013 年 3 月（担任）
「全然違うと思いますよ。最初は全然教室内でも話さへんかったけど。だんだんとクラスで話せるようになって。最初はほんまに声出せんかったけど、少しずつ、声がでるようになったと思います」

《総括》

2 年間の縦断的調査結果から、リスニング能力と情意要因に関して量的・質的調査結果から本研究を通して以下を明らかにした。

1) 縦断的調査結果から、小学児童の聴覚能力は、肯定的変化を示す。
2) 児童の情意側面は、プロジェクト型カリキュラムの援用（学期末のミニプロジェクト導入）において、維持する傾向にある。
3) 教師や教室内支援員の視点からみた小学児童の聴覚能力と心理的側面は、肯定的変化を示し、児童の言語運用能力と心理面において児童に効果があることが示された。

これまでに、経年データを用いた聴覚能力や情意要因（自律性・有能性・関係性・内発的動機づけ・CanDo・L2WTC・L2Ideal selves）に関して行った調査報告は、国内では非常に少なかったため、本調査は今後小学校外国語活動を行っていく上で、貴重な情報となりうる。今後は更に、全国規模での言語テストや情意面に関する調査が必要となろう。小学校外国語活動は開始しよりまだ数年しか経過していないため、まだ過渡期にあり、文字指導のあり方、開始年齢、教科化など、様々な問題を残している。今後、小学校外国語活動を推進していく上では、よりよい教育が行われていくためにも、更なる実証研究の蓄積が必要となる。本研究は今後の小学校外国語活

動を推進する上での、一示唆を提示するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10 件）

1. 平成 23 年 3 月. Elementary school pupils' motivation and affective variables in foreign language activities as related to annual hours of English instruction. *LET Kansai Chapter 13,* 1-15.
2. 平成 24 年 3 月. Motivating Japanese university EFL learners in the language classroom using a task-based approach. *Shoin ELTC Forum 1*, 21-30.
3. 平成 24 年 6 月. Designing and implementing task-based lessons to low proficiency EFL learners at a Japanese university. *On Task 2 (2)*, 57-59.
4. 平成 24 年 6 月. A longitudinal study of motivation, interest, Can-Do and willingness to communicate in foreign language activities among Japanese fifth-grade students. *Language Education and Technology 49,* 23-45.
5. 平成 25 年 6 月. The L2 self, motivation, international posture, willingness to communicate and Can-Do among Japanese university learners of English. *Language Education and Technology 50*, 43-67.
6. 平成 26 年 3 月. Longitudinal analysis of motivation and affective factors in foreign language activities focusing on the class factor. *Studies in English Language Teaching 37,* 59-75.
7. 平成 24 年 3 月. 小学児童における動機づけに関する縦断調査 ―成長曲線モデルを用いて―. 外国語教育メディア学会(LET) 関西支部 2011 年度メソドロジー研究部会報告論集, 74-80.
8. 平成 25 年 10 月. 大阪大学学部生を対象とした第二言語習得時における動機づけと心理的要因に関する研究報告. 平成 24 年度 TOEFL-ITP 実施に関する報告書 ―結果と分析・考察―. 大阪大学全学教育推進機構言語教育部門. 大阪大学大学院言語文化研究科, 49-63.
9. 平成 26 年 3 月. 小学校外国語活動における児童の動機づけと情意要因に関する縦断調査. 平成 24～26 年度 科学研究費補助金 若手研究(B) 課題番号 24720256 研究成果報告書.
10. 平成 26 年 3 月. (安達理恵氏［2］カレイラ松崎順子氏［3］と共同). 小学校外国語活動における動機づけと情意要因に関する研究と実践：実証研究の蓄積と今後の展望. 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 2013 年度メソドロジー研究会論文集, 63-74.

〔学会発表〕（計　15 件）

1. 平成 24 年 5 月. Motivating Japanese university EFL learners in the language classroom using task-based approach. TBL in Asia 2012. The JALT Task-based Learning Special Interest Group. Osaka Shoin Women's University, Osaka, Japan.
2. 平成 24 年 8 月. 大学英語学習者における自己決定理論を用いた動機づけと L2 理想自己・L2 義務自己に関する実証研究. The JACET 51st (2012) International Convention. 愛知県立大学.
3. 平成 24 年 8 月. L2 理想自己、国際的志向性、内発的動機づけ、コミュニケーションへの積極性に関する大学英語学習者を対象とした実証研究. 外国語教育メディア学会(LET) 第 52 回全国研究大会. 甲南大学.

4. 平成 25 年 3 月. A longitudinal study of intrinsic and extrinsic motivation, L2 ideal selves,
international posture, Can-Do among Japanese University EFL learners. AAAL 2013, American Associations for Applied Linguistics. Dallas, Texas, USA.
5. 平成 25 年 7月. 縦断的調査方法を用いた小学児童の動機づけ、情意要因、リスニング
に関する実証研究. 第13回 小学校英語教育学会 沖縄大会. 琉球大学.
6. 平成 25 年 7 月. (神田美穂氏［1］と共同). 小学校外国語活動における文字指導のあり方―大阪府豊能町の取り組みを踏まえて―. 第 13 回 小学校英語教育学会 沖縄大会. 琉球大学.
7. 平成 25 年 8 月. 小学校外国語活動における児童の動機づけと情意要因の縦断的変化：クラス要因を視野に入れて. The JACET 52nd (2013) International Convention. 京都大学.
8. 平成 25 年 8 月. (安達理恵氏[2]・カレイラ松崎順子氏[3] と共同). 小学校外国語活動における動機づけと情意要因に関する研究と実践：実証研究の蓄積と今後の展望. 企画シンポジウム. 外国語教育メディア学会(LET) 第 53 回全国研究大会. 文京学院大学.
9. 平成 25 年 9 月. A longitudinal analysis of fifth and sixth graders of psychological factors and listening abilities among Japanese elementary school EFL learners. BAAL 2013 Conference, British Association for Applied Linguistics. Heriot-Watt University, Edinburgh, Scotland, UK.
10 平成 26 年 1 月. A longitudinal analysis of individual differences in linguistic abilities and psychological factors among Japanese elementary school EFL learners. 12th Annual Hawaii———International Conference on Education. Hilton Waikiki Beach Hotel, Honolulu, Hawaii.
11. 平成 26 年 2 月. A longitudinal analysis of individual differences in listening, motivation and willingness to communicate among Japanese elementary school EFL learners. T.Yashima Workshop. Kansai University. 招待講演.
12. 平成 26 年 3 月. A longitudinal analysis of individual differences in linguistic abilities and psychological factors among Japanese elementary school EFL learners. Kansai University. T.Yashima Workshop. 招待講演.
13. 平成 26 年 5 月. Visualization of future possible L2 selves with the integration of Task-based design courses with the use of Technology Entertainment Design. TBL in Asia 2014. The JALT Task-based Learning Special Interest Group. Kinki University, Osaka, Japan.
14. 平成 26 年 8 月(予定). (八島智子氏[2]と共同). Overviews of motivation, communicative/ traditional language learning orientation, and linguistic abilities among Japanese university EFL learners. AILA World Congress 2014. International Association of Applied Linguistics (AILA). Brisbane's Convention Centre, Brisbane, Australia.
15. 平成 26 年 9 月(予定). A two-year longitudinal study of listening abilities and psychological factors

among children learning English in the Japanese EFL context. BAAL 2014 Conference. British Association for Applied Linguistics (BAAL). University of Warwick, UK.

〔図書〕（計 2 件）

1. 平成 25 年 10 月. Empirical studies of affective variables and motivational changes among Japanese elementary school EFL learners. Kinseido: Tokyo.
2. 平成 25 年 10 月.（共著）. A comprehensive summary of empirical studies of motivation among Japanese elementary school EFL learners. In M.T. Apple, D.D. Silva & T. Fellner (Eds.). *Foreign language motivation in Japan.* (pp. 93-109). Multilingual Matters. Bristol: UK.

〔その他〕
ホームページ等
www. rienishi.jimdo.com